
Change body

Sky Day

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Change body

【Nコード】

N2822E

【作者名】

Sky Day

【あらすじ】

オール大陸・・・人間が一つの生物に変化できる地。昔、一人の研究者が多の種族を一度に使い強大な力で大陸を滅ぼす寸前に選ばれた空の長、竜の長、獣の長、妖の長に天地神が力を与え研究者を封印した後、平和の世界が出来たが近々崩れ落ちていた・・・そんな中、奇跡的に助かったタ力族のスカイ、スノウ二人の大きな冒険が始まる。 <<著作中>>

第1話・皆の羽（前書き）

登場人物を紙に書いて小説を読むとどんな小説でも面白いよ！

第1話：皆の羽

日差しの良い太陽が照らす中、天下地上では別種族との争いが起きていた・・・

スカイ「ふはあくねむたくい。父ちゃん、母ちゃんどうしたの？タカ族の長さん集まって何？」

ムーン「ちよつと話しようと思ってな・・・お前に実は兄がいるんだ。」

スカイ「ええ！いきなり・・・つで集会の意味は？」

ニジ「タカ族の長として話す。最近、隠し切れない事が起きたので父が今、お前に話したのだ。行方がわからなかったのだが、ワシ族の誰かが見たと言っている。急に消えたのだからお前だけに会いに来るかもしれない。ということなのだ。そうなった場合・・・」

つと言おうとした時！外から誰かが走ってくる。

レイン「長！ワシ族が来ています。カラス族に追われているようです！」

ニジ「どういうことだ！レイン！皆を集める！」

レイン「わかりました！」

つと出口からタカの姿に変わり。空から皆を集めた。

レイン「皆、ムーンさんの家へ！集まるんだあ！」

皆「なんなんだあ？」「早く行きましょ」つと大騒ぎ

ムーンの家で全てのタカ族が集まった。

ニジ「よし集まったか。女は子供を連れて裏門からシカ族に行け！男は足止めだ！」

レイン「ワシ族がお見えです。」

ニジ「ワシ族の長ですか。これは大変で・・・」

キセル「キセルと申す。こちらが副長のリーフ、スモーク、アイで

す。」

ワシ三人「宜しくお願いします。」

ニジ「まず女、子供と一緒に非難させてください。そして戦えるものはわれわれと一緒に・・・」

キセル「わかりました。行ったとおりに動くんだ。」

タカの誰か立ち止まっているのを見つけた長は

ニジ「シャインいるか!？」

シャイン「はい!ここにいます。何ですか？」

ニジ「お前はスカイの母サン!お前の妹の所へ行つてスカイとそこ
の逃げ遅れたスノウとウインドさんを裏穴に連れて行け!

シャイン「わかりました!」

つとウインドさんに駆け寄る。

シャイン「ウインドさん行きますよ!」

つと裏穴に向かった。

カラスの姿になった敵が向かってくる・・・

ニジ「いくぞあ~~~~~~~~!!」

つと戦争が起きたのだった・・・

裏穴にいるのはサンとスカイ。裏穴に辿り着いた。

シャイン「サン!大丈夫?」

サン「大丈夫よ!ここの奥に出口があるわ。」

つとその時カラス族に囲まれていた。

シャイン「つくウインドさん!子供を連れて逃げて!サン行くわよ
!」

サン「ウインドさん任しておいて!早く行って!スカイ!兄の名前
はクラウンよ!!」

ウインド「わかりました・・・二人とも行くよ!」

つと三人は走り出す。

シャイン「久しぶりね。サン、二人で戦うのお!」

サン「そうね!・・・シャイン!危ない!」

二人で勝てるわけも無く。シャインの身代わりになったサンは死ん

だ・・・

カラス族「身代わりされても意味無かったな！」とトドメをしようとしたその時！

カラス族「まて！そいつは捕らえる。理由は何も無い。使えるかもしれないがな。」

つとシャインは助かったのだった。

ウインド「もうすぐ出口よ！」

つと出た瞬間にはカラス族に囲まれていた。

ウインド「スノウ、スカイ隠れていなさい！」

つと一人で戦ったスノウの母は勝てないと思つてても戦った。だがスノウの前で母ウインドはカラス族に殺された。

カラス族「小僧二人！お前ら運悪いなあ！じゃあな！」

つとカラス族の槍で突き刺そうとした瞬間！

大きな壁がスカイ、スノウを守った。カラス族は一気に吹っ飛び逃げていった。

ダイヤ「大丈夫かい？心配しなくていいよ。クマ族のダイヤって言うんだ。偶然だったよ私がここに来ないとやばかったね。私達のことおいで」

スノウ「ぼ、僕の・・・お母さん、た、助けてよ！」

ダイヤは駆け寄る。

ダイヤ「助けられない・・・死んでるわ。」

スノウ「た！助けてよ！お願い僕の命いらさないからあ！」

ダイヤ「あまたれるんじゃない！そんな事言ってる人はたくさんいるわ！みんな精一杯生きてるの！死んだのよ！なにもできないの！・・・ごめんなさい；・・・来なさい何も出来ないでしょ」

二人は無言のままクマ族の彼女に付いていった。

クマ族の地。皆はスカイ、スノウをじろじろ見る。ダイヤは大きなテントの中に入っていった。テントの中ではもめあっていた。

ダイヤ「長！ただいま戻りました。タカ族の子供を助けました。」
クロバ「又いらん事しやがって。」

ミツバ「何を言っているんだ！お前はだから副長に選ばれなかったんだろ！言葉を慎め！」

クロバ「副長になってたら逆だったかもしれないぞ！」

ミツバ「つく黙れ！お前と一緒にするな！」

ハート「いい加減にしろ！私は副長をダイヤにしたかったのだ！ミツバはすぐにキレル。クロバは言葉使いが悪い・・・まあミツバの方がマシだったものの・・・ふうよく帰ってきたな、ダイヤ。ミツバ！、クロバ！仕事に戻れ！」

つと二人は戻った。

ハート「では二人を部屋に連れて行ってくれ。・・・その君ちよつと来なさい。」

・・・・・・スカイ「俺！？」

ダイヤ「先行つとくよ。」

ハート「君がスカイ君だねムーンさんの子供やる？聞いてるよ。どうなったんだい？皆は・・・？」

スカイ「わかりません・・・けどなぜ私のことを？」

ハート「君のおじいちゃんにセイさんおるだろっ？その友達なの。セイさんは昔はとても強い方だったのだよ。」

スカイ「じゃあおじいちゃんのこと沢山知ってる？教えて！」

ハート「知ってるとも。秘密を教えたあげよう。タカ族とワシ族の間に生まれたセイさんは伝説の霊鳥ヒノトリを扱う人だったんだよ。そして空の長に選ばれ神鳥スザクも扱った偉大な人なんだ。それからスザクは手放して普通の生活しているんだよ。四神の中の他の人達と戦った人、神龍セイリユウ神獣ビヤツコ神妖ゲンブも見た人だこれは秘密だよ。」

スカイ「おじいちゃんすごい！！！」

ハート「疲れているでしょ部屋はここに書いてるから。」

スカイ「ありがとうございます。おやすみ〜」

ダイヤ「ここだよ部屋はあとスノウごめんね。ひどい事言っちゃって。私の母も盗賊サル族に殺されたの。私は三日、母にしがみついて泣いた、かれるほど・・・ある日きずいたそんなことじゃ駄目だって、だから早めに立ち直って欲しくて・・・ごめんなさい言い訳みたいな・・・」

スノウ「・・・ありがとうございます。」

かちやつと扉を開けてスカイが入ってきた。

ダイヤ「帰ってきたのね。じゃそろそろ戻るね。おやすみなさい！」

スノウ「強く・・・強くなりたい！皆を守れるように強くなりたい！」

ダイヤ「・・・わかったわ明日、庭に集合ね。二人とも強くならしてあげる。」

そう言って戻った。

スカイ「いろいろあったね・・・ふう」

スノウ「うん・・・強くなるまで一緒に居てよ・・・ずっとね。」

スカイ「わかったよ。じゃ明日。寝坊しないでよ。おやすみ。」

スノウ「僕達、皆の羽をかかっているよ。皆の為に生きる！っと心の中で思いながら。おやすみ・・・」

こうして始まったのだ・・・

第2話：未来への犠牲（前書き）

登場人物を紙に書いて読むとどんな小説でも面白いよ！

第2話：未来への犠牲

スカイ、スノウが助かった中・・・非難した女性、子供・・・仲間を守る為戦う男たち・・・タカ族、ワシ族、カラス族の戦いを・・・シカ族は援軍に來たのであるうか・・・女性、子供を助けたのであるうか・・・今！告げる・・・

ニジ「ひるむな！進め！レイン！皆逃げたか！？」

レイン「女性、子供、皆逃げました！シカ族はまだのようです。」

ニジ「わかった。セイさん封印を・・・」

セイ「わかった。久し振りじゃ〜ヒノトリ・・・」

ムーン「長！待ってください！シカ族が山から下りたところです。」

ニジ「わかった。戦っているイカズチとワシ族を集めてくれ。」

ムーン「わかりました。」

ニジ「では・・・やります。はあああああ！！我、伝説の三鳥の靈鳥ヒノトリ目覚めよ！」

ニジの手から光が放ちセイは靈鳥となった。

ムーン「集まりました！」

ニジ「よし！セイさん後は頼みました！レインお前が副長だ！心して行け！」

アイ「ワシ族の代長として残ります。」

ニジ「わかりました。では、ムーン、イカズチ、キセルさん、リフさん、スモークさん！行きます！」

こうして3人は戦いを・・・6人は援軍、会議を・・・二つに分かれたのだった。」

こちら後線組。

ニジ「つくカラス族め！しつこく付いてきやがって！・・・皆、

先行ってくれ。」

ムーン：イカズチ「わかりました。私達が戻るまで待つててくださいー！」

つと4人は向かっていった。

ムーン「あとどれくらいだ！」

イカズチ「あともうちよ……困まれたー！」

5人はカラス族に囲まれていた。

ムーン「つくキセルさん！どうしますか？」

キセル「その必要は無い！カラス族を先回りさせたのは俺なのだから……ふははははお前らは騙されたのだよ！やれ！」

ムーン「裏切り者め！つくイカズチどうするんだ？」

イカズチ「イチイチ聞くな！俺にはスノウがいる死んでたまるかー！」

ムーン「そうだな……」

だが勝てるはずも無く二人はシャインと同じく捕らえられたのだ。つた。

ムーン「つく長、逃げてください……聞こえるはず無いか……」

キセル「よし！次はタカ族の長だ！行くぞ！」

ニジ「……援軍か！早いなあいつら！！助かった。」

キセル「残念だったな！！タカ族の長！お前は死ぬんだ！」

ニジ「裏切りやがったか……一対一でどうだワシ族の長！」

キセル「いいだろう。だがその前に！リーフ行け！」

二人は激闘の結果タカに変化したニジの爪が突き刺さりリーフを倒したが……後ろからスモークにワシに変化したスモークの爪が背中に突き刺さりニジは倒れ死んだ……

キセル「次は戦場だ！」

こちら前線組。

セイ「こりゃ無理だ！相手の敵が多すぎる。シカ族はまだなのか？
レイン！そろそろ逃げて態勢を立て直さないとやばいぞ。」
レイン「だめだよ皆を信じよう！」

アイ「いや、セイさんの言うとおりにした方がいい。」

レイン「・・・僕はここに残る！誰も通さない！」

アイ「じゃ僕は行く！援軍はこない。何かあったかもしれないだ
ぞ！」

セイ「そうじゃ！お前の彼女を助けたいなら私と来い！お前が選
ぶんだ。」

レイン「つく俺の選択が間違っていたら・・・俺の彼女が死ぬか
もしれないのか・・・」

レインの頭に彼女が浮かぶ・・・

アンブレラ「レイン！こつち来てよ。」

レイン「なんだよ。又、俺を罠に落とすきか？」

アンブレラ「ちがうよ！私を信じて。早く！」

レイン「わかったよ。今行く・・・なんだ？」

アンブレラ「遅い！もう見えなくなっちゃたよ。もう！」

レイン「すまんすまん。じゃあ、又、見に来ようか。」

アンブレラ「今度は信じなさいよ！」友達ぐらい信じなさい！」

レイン「わかったわかった。」

レイン「わかった。セイさん、アイさん信じます。」

セイ「よし。退却！！態勢を立て直す！」

アイ「皆。引くんだ！」

こうして前線組は逃げたのであった。

キセル「カラスの長さんよくやったか？」

エスパ「今、長は取り込み中だ。私が代わりに話をする。」

キセル「じゃあタカ族の長を殺したと言え！俺たちは残ったやつをかたずける。」

テントの中からカラスの長とタカの誰かが出てくる・・・サイコ「その必要は無い。やつらはこつちに来る。大きな戦争が始まる。準備だ！！それでは取り掛かってくれ。」

????「わかった。じゃあどこかで。」

サイコ「こちらにはカラス族ワシ族がいる！すでにイノシシ族とネズミ族が入った。今、サル族、ウサギ族、クマ族に行っている！・・・皆とりかかれえ~~~~！！！」

ウサギ族の地

カラス族「ウサギ族の長！カラス族と手を組まないでしょうか？」

キャロ「うむ。理由は聞いている。全軍カラス族の長に尽くそう。」

サル族の地

カラス族「サル族の長。大きな戦争が始まります。私達と共に・・・」

「

バーナ「おう、わかった。だが悪い状況になったら裏切るつもりでカラス族の長に伝えとけ！俺たちは盗賊だからな！」

クマ族の地

真夜中・・・ベッドで寝ているスカイ、スノウ。」

スノウ「っは！！ふう夢か・・・お母さん、お父さん、みんな元気かなあ・・・」

スノウはスカイの地図を手に取り、トイレにいった。何か聞こえる・・・好奇心のスノウは音のする部屋を覗き込む。クロバだった。その横には・・・カラス族！！スノウは話を聞いた。

カラス族「クロバさん我々カラス族と組まないでしょうか？」

クロバ「無理だ。みんなタカ族に付いている。」

カラス族「ではあなたが裏切ればいい。」

クロバ「なにを言っておる。お前はクマ族を潰すつもりか。今回は見逃す。帰ってくれ。」

カラス族「ふう、仕方ありません。あなたの息子に……」
クロバ「どういうことだ！貴様なにをした！」

カラス族「何もされたくなかったらクマ族の長を殺すのです。そうしたなら会わせましょう。」

スノウが間違えて音をたててしまう。

カラス族「誰か来たみたいですね。では帰ります。会えたらいいですね……ふふふ。」

スノウは慌てて逃げる！！前に立ちはだかる！クロバだ。

クロバ「お前か……殺しはしない安心しろ。だがこのことは誰にも言っな。」

スノウ「わ、わかりました。」

クロバ「寝ろ。おやすみ」

次の日

スカイ「うふあゝおい起きろよスノウ。」

スノウ「あゝおはよう。」

スカイ「早くいくぞ！さっさとしろよ。先いっとくぞ」

スノウ「（夢だったのかな）まってもうすぐだから。」

二人は、庭に向かった。

スカイ「うわゝ大きな庭だな！」

ダイヤ「おはよう！体操しといてね。今日はしんどいよ！」

こうして力を上げる為トレーニングが始まった。みんな未来への犠牲……子供達に未来へ届かせる為に……

第3話：会議の到来

うまく逃げ切ったニジ、レイン、アイ。三人はクマ族と連絡を取り、シカ族もクマ族の地で話し合おうと決断した。逃げ切ったアンブレラ達。カラス族の長サイコ、副長のエスパ。裏切ったキセルとスモーク。捕らえられたシャイン、ムーン、イカズチ。謎のタカ族の一人。何も知らないスカイとスノウ。大きな戦争まで戦力争奪が始まる。

カラス族の地

エスパ「長！ウサギ族、サル族はこちらに付きました。クマ族は不明です。」

サイコ「うむ。これでそろつたな。」

キセル「sonだけがいいのかよ？」

サイコ「ああ、余りに多すぎてもまだ引つ張る力がない。これで勝つてからな。」

スモーク「大変です！リス族が全軍でやって来ます！

キセル「奇襲か！？」

サイコ「いや違う。私は以前、交渉したのだ。断っていたが、来てくれたのだな。」

エスパ「畏かもしれません。」

サイコ「それは無い。リス族はいつも中立だからな。」

クルミ「カラス族の長。私達も参加します。」

サイコ「理由はともあれありがたい、頼みます。」

こうしてカラス族は出来るだけの族を集めたのだった。あとは集まるのを待つだけとなった。

クマ族の地

ダイヤ「次はこの的！その次はこつち！」

スノウ「変化がもたない！」

人間の姿に戻ったスノウは空から落ちていく！誰かが飛んでくる。

スカイ「大丈夫かよ！スノウしかっりしろよ。」

スノウ「ありがとう。」

二人は地上に到着。

ダイヤ「大分、上達したわね。けど疲れたら休まないと死ぬわよ！」

スノウ「すみませんでした。スカイはいいなあ。上達早いね。」

ダイヤ「そうね。私もびっくりしたわ。っていうことで今日は終わり。じゃ又明日。」

誰かが慌てて来る。みんな！緊急集合だ！……ざわめきながらも集まる皆。

ハート「皆、急にすまない。カラス族が急に攻めてきたことは知っているそうだが、もう大きな力を付けている。いろんな族も入っている。ここにシカ族とタカ族の生き残りが来る。だから皆、わかるな。準備をするんだ！！」

皆「おおおお！！」

ハート「ミツバ！クロバ！一人はシカ族へ。もう一方はタカ族へ行くんだ。わかつたな！」

ミツバ：クロバ「わかりました。」

ハート「ダイヤ！お前はタヌキ族とキツネ族の戦争を止める！つで仲間にいれてくれ。無理ならいいがな。」

ダイヤ「出来ることだけはしましょう。」

スノウ「私達も同行します。つねスカイ。」

スカイ「ふざけたこというな。変化もあんまい出来ないくせに。」

ダイヤ「そうですよ。さっきの疲れもまだ残ってるからね。」

ハート「ふむ、いいじゃないか。体験だ。」

ダイヤ「いや、しかし・・・」

ハート「大丈夫だが守ってやることは出来ないからね。」

スカイ「俺は行かないからね。」

スノウ「お前がいなくなったら大丈夫だから！」

スカイ「勝手にしろ。」
ダイヤ「では、行きますよスノウ。絶対近くに来てください。」
こうしてバラバラに分かれて戦力をあげるのだった。

その頃、捕まえられたシャイン。ムーン、イカズチ達は牢屋に連れて来られていた。

ムーン「つく．．．シャインさん！！助かったんですか！よかった。」

シャイン「ムーンさん、イカズチさんご無事でなりよりです．．．
・ウインドさんとスカイ、スノウは逃げ切ったかわかりませんが．．
・サンが．．．」

シャインはここで泣をこぼし．．．
イカズチ「戦争つてのはこんなもんさ。」
こうして静かな日がつづいていた。

タカ族一行

セイ「ふう。レイン、アイここで待っててくれ。」

レイン「こんな森の中になにがあるんですか？」

セイ「時間が無い。すまない行って来る。」

アイ「何だと思う？」

レイン「わからないよ。」

中に入ったセイは．．．

セイ「御用だ。パンダ族。」

サザ「よくぞ来られた。」

セイ「仲間になってくれるのか？」

サザ「時間が無いんだろ。まず言う。相手はカラス族、イノシシ族、リス族、ウサギ族、ネズミ族、サル族だ。我らが入ったとしても勝てないだろうな。」

セイ「だから今パンダ族に仲間にならないかと聞いてるんだ。」
サザ「昔から話をぶっ飛ばすなあ。私達も戦闘に参加する。」

セイ「では早速、準備をしてクマ族へ行く。」

サザ「はいはい。」

レイン「まだですかねえ〜」

アイ「誰か来る！」

ミツバ「私は敵ではない！クマ族だ。道案内に来た。」

レイン「こちらまで来て下さるとはありがたい。タカ族の誰かはいらるのですか？」

ミツバ「長の命令できましたので。こちらにスカイとスノウを助けました。シカ族に女性、子供など助かったようです。」

セイ「すまない。遅れたパンダ族がこちらに入った。」

アイ「パンダ族とは強い戦力になりますね。」

サザ「そういつてくれるとありがたい。宜しく頼む。パンダ族の長だ。」

レイン：ミツバ：アイ「頼みます。」

ミツバ「では行きましょう。」

こうしてクマ族の地へ向かっていった。

シカ族一行

エベレスト「皆、疲れては無いか？」

シカ族「長、皆疲れておりますが、ここから近くには敵がおります。」

アンブレラ「がんばりましょう。あとちよつとだから。」

シカ族「無礼者！長に向かって言い方が！」

エベレスト「いいんだ。道を知っているのか？」

アンブレラ「はい。教えたあげる代わりにタカ族のレインと言う人物が生きているか知りませんか？」

エベレスト「残念だが道ぐらいいは知っている。しかもレインと言うものはわからない。」

アンブレラ「そうですか・・・」

シカ族「長、クマ族が迎えにきました。」

エベレスト「まったくわざわざ。合同していくぞ。」
こうしてクマ族の地へ行った。そして数時間後・・・

クマ族「長！タカ族ワシ族それと・・・パンダ族も来ています。」

ハート「そうか。通してくれ。」

クマ族「わかりました。どうぞこちらへ。」

セイ「久し振りだな。ハート！」

ハート「お久し振りです。早速・・・」

クマ族「長！シカ族が来ました。」

ハート「通してくれ。セイさん。サザさん。えくと。ワシ族の長は・

・・・」

アイ「行方不明だ。タカ族、ワシ族。両長行方不明だ。ワシ族は私が代わりを。タカ族はセイさんが代わりに。」

ハート「わかりました。エベレストさんも。こちらへ・・・」

こうして、天地暗黒時代〜天地四神時代〜天地守神時代まででの二回目の会議を始めたのだった。

そして久し振りに会った者達と感動の再会をしたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2822e/>

Change body

2011年1月26日03時13分発行